「仙台・羅須地人協会」セミナー 大内秀明経済学の解読

第3回 大内『価値論の形成』を読む－その1（「序章」）

田中　史郎

はじめに

本書は、先生の学位論文をベースとした本格的な経済原論の研究書である。それゆえ、以降の先生の思想や理論の基礎となるものといえるだろうが、かなり難解である。そこで、あらかじめ予備知識の整理をしておきたい。

①経済学の三段階論（原理論・段階論・現状分析論）とは

②原理論の構成

第1篇（流通論） 商品、貨幣、資本の形式

第2篇（生産論） 労働と生産、資本の回転と循環、社会的再生産（再生産表式）

第3篇（分配論） 利潤（資本の競争）、地代、利子（信用・商業資本）、諸階級

③「価値論」と「恐慌論」の位置、および「形成」の意味

序論　第1章　初期マルクスの経済学

第1節　初期マルクスと労働価値説学

本節では、初期と呼ばれる、1840年代のマルクスの著作が吟味される。『経済学・哲学草稿』などに見られる、古典派経済学（国民経済学）に対するマルクスの批判的な提起が取り上げられ、概説されている。

先生は、初期マルクスにおいて、古典派経済学を3点において批判し、それを乗り越える視点を明確化していると評価している。

①私的所有の問題－「要するに古典派経済学の欠陥は、富を事実上商品経済的富としながら、それを**特殊歴史的**な根拠から...把握しなかった」（6）点。

②競争の問題－「リカアドが価値を「生産費」に解消してしてしまって、効用、したがって**需要や競争の側面**を...捨象した」（7）点。

③労働の自己疎外の問題[*1]－「古典派経済学では...「労働」が「自己疎外」の形態にあることが看過されている。...つまり富を単なる労働生産物に解消し、**交換および分配を等労働量の交換から...解明しようとする労働価値説**」（10-11）になっている点。

そして、初期マルクスの意義を以下の様に総括している。

「第一に、はじめから古典派経済学批判の見地は強烈であり、それゆえ彼らの労働価値説への疑問が濃厚だったこと。...第二に、マルクスは労働価値説を需給の変化、価格の変動、競争の過程から切り離すことなく、...理解していたこと。...第三に、マルクスは右の変動過程を優れて**産業循環**の過程として把握し、資本の価値破壊による全面的な移動を含む競争過程、価値革命をとうしての価格変動としたのである。...第四に、**労働価値説**は資本の価値増殖の根拠にすえられていること、などである。」（23）

⇒みられるように、先生はこれらをマルクスの古典派経済学に対する積極面としている。

⇒以上の点に、異論はない。宇野理論においては、すでに通説的な理解といえよう。

---

*1　マルクスは『経済学・哲学草稿』の「第1草稿、4.疎外された労働」の中で、疎外を「労働者からの労働生産物の疎外」、「労働者からの労働の疎外」、「類的生活からの疎外」、「人間の人間からの疎外」の４つに分けて論じている。

第2節　唯物史観と経済学

この時代にあって、以上のようなマルクスの積極面に対して、評価できない点があり、それがマルクスの唯物史観であると、先生は議論を展開する。

唯物史観の内容が、『ドイツ・イデオロギー』を要約しつつ、以下の様にまとめられている。

「マルクスは、生産力の発展によって**分業**が社会的に拡大しつつ、生産関係としての所有形態が原始的な「部族所有権」から古代的な「共同体・国家所有権」、－そこでは付随的に私的所有が出現するが－さらに「封建的・身分的所有権」へと転化するものと考えているのである。さらにまた、そのような生産力と生産関係に媒介された「現実の・働く人間」によって、「もろもろの観念や表象」、そして「意識」などの上部構造を基礎づけようというのが、『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の基本的構造ともなっているのである。」（31）

⇒ここでは「分業」がキーワードになっていることを読みとれる。唯物史観にかんしての以上のような理解のもと、その批判が次のように示される。

「要するに『ドイツ・イデオロギー』の唯物史観の構造は、...「労働の自己疎外」が**分業**・交換という抽象的な関係にそくして理解されて、したがって充分に**商品経済的な形態規定性**において疎外の意味が提起されていなかったこと。さらに、疎外がそうした抽象性に解消されていたために、その歴史的根拠をつくという課題が、容易に**分業**や交換・所有の歴史的発生と変化の分析に向けられてしまったことに起因するのである。」（35）[*2]

⇒ここでの批判の要点は、唯物史観の要である「労働の自己疎外」は分業に求められるが、それが**商品経済的な形態規定性**において把握されていないという指摘にある。これが難点だと。

⇒ここでやや疑問。一般的には唯物史観といえば、『経済学批判』「序言」の「**導きの糸**」の部分を指すが、どうしてこの部分が対象とされていないのか？

というのも、『経済学批判』「序言」の「導きの糸」の部分においては、「分業」という文言が登場していない。そうだとすれば、「唯物史観＝分業」批判はやや的外れになるのではないか。先生に伺ってみたいところである。

⇒いずれにしても、第1章において、第1節で、マルクスの提起した労働価値説は古典派経済学を止揚するものとして高く評価するものの、第2節で、その唯物史観にかんしては積極的な評価を与えていないという構成になっているといえる。

第2章　純粋資本主義と原理論

第1節　「経済学の方法」について

前章を受けてここでは、『経済学批判要綱（グルントリッセ）』と『資本論』を対比しつつ経済学の方法が吟味される。また、最後に「**プラン問題**」にも言及されている[*3]。

---

*2 ここから「世界資本主義論」への批判に向けられが、ここでは割愛する。

*3 プラン問題とは以下を指す。マルクスは経済学の体系化に向けていくつかのプランを立案している。その中で重要なものが「1.資本、2.土地所有、3.賃労働、4.国家、5.外国貿易、6.世界市場」（1858年4月2日付け、マルクスのエンゲルス宛の手紙）『資本論書簡（1）』248頁）の6部からなる構想だ。これを前提として、『資本論』に至ってこの構想に変更があったのか、否か、が論争になった。

まず『資本論』の対象を確認するところから、考察が始まる。

「みられるようにマルクスは、明瞭に「資本制生産様式、および、これに照応する生産＝ならびに交易諸関係」を『資本論』の対象に置いている。しかも、この対象設定については、**物理学**と同様に「撹乱的な諸影響」を排除し、そのことによって「過程の純粋な経過を保証する」実験室的な状況の必要を強調するのであるから、「資本制生産様式」は、まさに**純粋な資本主義**ということになる。」（47）

そしてさらに、以下の論理でこの点がより裏打ちされる。

「やや逆説のようではあるが、一方で不純な資本主義の存在を強く意識しなければならないのである。だからこそ、19世紀末葉に資本主義が金融資本段階をむえて、資本主義の自律的発展が消極化し、純化傾向も鈍化する時点で、むしろ純粋資本主義の対象を自覚的に設定する可能性も強化されるのである。」（49）

⇒鋭い指摘であり、こうして『資本論』対象が純粋な資本主義であることが強調されている。

しかし、『資本論』には、そうではない方法も存在しているという。

「かならずしも明確ではないが、論文（『ヴェスニク・エヴロープイ』掲載論文－引用者）が『資本論』の方法を資本主義の歴史的な生成・発展・消滅の法則解明にあると要約したことについて、マルクス自身も肯定しているとみていいであろう。とすれば、マルクスのいう「経済的運動法則」とは、ほかでもない歴史的社会である資本主義の生成・発展・没落の段階的変化についての法則ということになる。」（50）

⇒このように『資本論』には、資本主義の歴史的な生成・発展・消滅の解明を試みる要素もあるが、そうだとすると、矛盾が生じる。いわゆる歴史的＝論理的な方法と純粋資本主義の方法は矛盾せざるを得ないが、先生は、「『資本論』の積極的な方法として、それ（純粋資本主義の方法）を評価しなければならないのである。」（56-7）と結論づけている。この点に異論はない。

この後、『経済学批判要綱』にある「**上向法・下向法**」の問題、それとも関連する「**プラン問題**」について検討されるが、『資本論』の対象を純粋資本主義とする方法を確立したことにより、その回答はすでに明らかだろう。

すなわち、上向法では、「資本主義内部の部分から全体へ」という方法が本来のものであり、それに歴史的な発展過程を反映させるものではないこと。したがってまた、『経済学批判要綱』に示された「プラン」も、『資本論』においては変更されているとう見解である。

⇒先生が課題としたこのような議論の背後には、一方でマルクス経済学におけるいわゆる「**正統派**」との論戦が、他方で宇野派内での「**世界資本主義派**」との見解の相違が横たわっている。ある意味で、そうした構図を意識しないと理解しにくい点がある。

第2節　純粋資本主義と原理論

序論最後の本節においては、純粋資本主義と原理論の関係が考察されるが、その内容は「世界資本主義論」批判を念頭に置いたものにもなっている。

以下の様に課題設定がなされる。

「…つぎのふたつの主要な論点を摘出できるように思われる。その第1は、『資本論』冒頭商品の性格に関わるもの…、それを**資本主義社会における商品**とするか、歴史上の**単純**

商品とみるかというものである。第2は、その冒頭商品において、積極的に**価値の実体規定が可能であるか、否か**という論点に他ならない。」（73）

⇒第1の点は解りやすいが、第2の点は説明を要する。この部分は否定的な表現で示されているが、いわんとするところは以下である。冒頭商品を、資本主義社会における商品であることをふまえ、**流通形態としての商品**として抽象できるか、という問題である。

まず、第1の問題。

「以上のように考えれば、経済学の原理論の対象は、どうしても純粋資本主義として設定されなければならないが、そうなれば冒頭商品を資本家的商品経済における商品と結論することは、すでに自明であろう。ただ、誤解を避けるために念のため指摘しておけば、

ここで資本家的商品経済における商品というばあい、それを単に資本の生産過程の生産物に限定する必要はない。たとえば、**労働力商品**やそれに対応して商品化される**土地**も、商品形態としては包含されていると考えていいのである。それによって上記の対象設定が**あいまいになるわけではない**のであって、これらの商品は、たしかに資本の生産過程で直接には生産されないにしても、いうまでもなく**資本主義社会にのみ固有な商品**であり、いわゆる非資本主義的な単純商品ではないからである。」（86）

⇒すでに繰り返されてきたことだが、引用の前半では『資本論』冒頭商品は資本主義社会における商品であることが強調される。この点に異論はない。その上で、後半の指摘、つまり、冒頭の商品に、労働力商品や土地も加えることははきわめて重要だろう。その理由として、それによって、①対象設定があいまいになるわけではないという点、②単純商品ではないという点を上げているが、それにはやや疑問。むしろ流通形態における、**当事者**を想定すれば良いのではないか。

そして第2の問題が吟味される。

「そこで、...右の資本主義的商品について、価値の実体規定からきりはなして形態規定をとりだすことができるかどうか。いい換えると、**純粋に流通形態**として商品・貨幣・資本の展開が可能であるか否かの検討に移ろう。」（87）

「かくて、商品・貨幣・資本の流通過程としての性格を強調し、さらに原理論の展開を流通形態からはじめることにしても、その理由として非資本主義的商品経済や、そこでの単純商品の性格を持ち出す必要はいささかもない。」（91）

そして、次のようにこの点が補強される。

「そこで、...資本主義的商品のばあい、なぜ、いかなる意味において純粋に流通形態としての商品を抽象できるかの検討に移ろう。...つまり、**単純商品では**、農民や農奴の生産した**剰余生産物**が主たる商品を構成するが、しかし、それは共同体内部の再生産に入り込む部分と截然（せつぜん）とわけることはできなかった。その意味で流通形態と内部の再生産過程には曖昧な関係が残るのであるが、それに反して**資本家的商品経済では**、たとばG－W…P…W'－G’の形式でも明らかなとおり、流通部面と生産過程との区別は歴然としている。...流通に入って商品化されるかぎりで流通が生産から区別されるにすぎないというようなものでは決してない。... そこにまたW’が完全な意味で「他人のための使用価値」になると同時に、商品としての性格を積極的に付与されることになるのである。」（92）

⇒以上のような考察に異論はない。

このように第2章においては、原理論の前提となる、純粋資本主義の設定の意義や、じ

つは同様な問題だが経済学の方法が検討され確定された[*4]。こうような準備をふまえ、いよいよ、「本論」の展開が開始されることになるのである。

【参考】マルクス、エンゲルス　著作略年譜

1841 M「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異」(初公表は 1902)
1843-1845 M**「1844 年の経済学・哲学手稿」**を含むノート(初公表は 1932)
1843 M「ヘーゲル法哲学の批判から〔ヘーゲル国法論批判〕」(初公表は 1927)
1844 M『ユダヤ人問題によせて』、M『ヘーゲル法哲学批判序説』、E『国民経済学批判大綱』(『独仏年誌』)
1844 ME『聖家族』、E『イギリスにおける労働者階級の状態』
1845 M「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(初公表は 1888)
1845-1846 ME**「ドイツ・イデオロギー」**(初公表は 1926)
1847 M**『哲学の貧困』**
1848 M『自由貿易問題についての演説』、ME**『共産党宣言』**
1849 M**『賃労働と資本』**(『新ライン新聞』に連載。1891 に小冊子として刊行)
1848-1850 M『フランスにおける階級闘争』(『新ライン新聞』に連載。1895 に小冊子として刊行)
1851-1852 E『ドイツにおける革命と反革命』(『ニューヨーク・トリビューン』紙に掲載)
1852 M『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』
1853 M『イギリスのインド支配』、M『イギリスのインド支配の将来の結果』(『ニューヨーク・トリビューン』)
1857-1858 M**「経済学批判要綱 グルントリッセ」**を含むノート(初公表は 1939-1941)
1859 M**『経済学批判』**
1861-1863 M「剰余価値にかんする諸学説」を含むノート(1905-1910 に**『剰余価値学説史』**として刊行)
1863-1865 M「直接的生産過程の諸結果」(初公表は 1933)を含むノート
1864 M『国際労働者協会創立宣言』、M『国際労働者協会暫定規約』
1865 M**「賃金、価格、利潤」**(国際労働者協会中央評議会で行なった講演。刊行は 1898)
1867 M**『資本論』第1部・初版**(1872-1873 に**第2版**、1872-1875 に**フランス語版**が刊行)
1871 M『フランスにおける内乱』
1875 M**「ドイツ労働者党綱領評注〔ゴータ綱領批判〕」**(初公表は 1891)
1877 M「『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピスキ』編集部への手紙」(初公表は 1886)
1878 E**『オイゲン・デューリング氏の科学の変革〔反デューリング論〕』**
1880 E**『空想から科学への社会主義の発展』**
1881 M**「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」**(初公表は 1924) **(1883 マルクス死去)**
1884 E**『家族、私有財産および国家の起源』**
1885 M**『資本論』第2部**(エンゲルス編集)
1888 E『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結〔フォイエルバッハ論〕
1894 M**『資本論』第3部**(エンゲルス編集) **(1895 エンゲルス死去)**

---

*4 原理論の冒頭商品にかんする議論には学ぶところが大だが、本節の最後の文言の意味が理解できない。これは大きな問題ではないので、「注」とするが。「いわゆる資本主義的商品こそ、流通形態としての抽象を可能にするものといわなければならないが、もちろん流通形態としての性格は、単純商品にも部分的には存在する以上、そして、その点に限定すれば、いわゆる資本主義的商品と単純商品の共通性といってもいい。しかし、それは原理的展開の出発点にある資本主義的商品の形態規定を基礎にして、そして、それからの類推によってのみ指摘できることであって、まさに「人間の解剖は猿の解剖の解剖にたいするひとつの鍵」にとどまり、**人間の解剖を猿のそれに解消するわけにはいかない**のである。」(98)
　ここで引用されているマルクスの『経済学批判』「序説」の文言は、巷で流布している「物事（経済）は、古いものから研究すべし...」という常識に対して異を唱えるもので、「資本主義経済（分析）は古代その他の経済（分析）への鍵を提供する」という点を強調しているもの。そこで、「人間の解剖（資本主義経済の分析）を猿のそれ（古代その他の経済分析）に**解消**するわけにはいかない」という意味が率直に解らない。先生に伺ってみたい一つである。